ほぼ週刊コラム「Partnership論」　その５１

**サッカー日本代表・本田圭佑　『チームワークは日本人なら生得的。必要なのは「個」。』**

2013.06.14　齋藤旬（[www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp)）　rev.1

**Partnership論教科書の和訳作業はChapter 2に入った。**Chapter 1がcorporate-like派のHansmann, Kraakmanの論文だったが、Chapter 2はpartnership-like派、いや、「LLCはpartnershipそのものだ」という考えを持つRibsteinの論文『The Evolving Partnership』だ。36頁にわたる壮大な論文。ということでしばしお待ちください…。

今週は、表題に挙げた話題。即ち、6月4日にW杯出場決定の世界一番乗りを決めたサッカー日本代表チーム本田圭佑の「W杯優勝には、個を高めることが必要」の意見表明に関連して、「よくぞ発言してくれた」の立場から思うことを述べる。そして、上り調子に入った日本サッカー界にあやかって、低調ニッポン経済の打開策のヒントを探りたい。

**ともすると「和を乱す」ととられがちな内容だし**,実際、中田英寿 --- 1998年仏W杯、2002年日韓W杯、2006年独W杯に出場、直後の2006年に29歳で現役引退 --- が同様の発言をした際は、同僚選手やマスコミからは「賛同」というよりは「反発」が多かった様に私は記憶している。そして中田は29歳の若さで引退した。

しかし今回の本田発言というか「苦言」は、本田から名指しで批判された今野選手も含め日本人の多くから「賛同」が得られている様だ。中田がいた7年前の日本代表チームと違い、本田がいる現在のチームは「個」を高めることを、来年のブラジル杯に向けての今後一年間の目標とすることに同意した。

どうして受け入れられたのだろうか？何が変わったのだろうか？

「選手一人一人の長所を挙げた後での辛口」「劇的なPKを決めた直後の当（とう）の本田の発言」。確かにそれらもあるだろう。しかし決定的要因ではない様な気がする。日本人が本田の苦言を受け入れた決定的要因、それは．．．。

**2010年の南アW杯での岡田監督のほぼ「全とっ替え」選手起用によって種まきされたと思う**。2010年、南アW杯直前の四つの強化試合、日本代表チームは散々だった。4月7日セルビア代表戦も、5月24日韓国代表戦も、5月30日イングランド代表戦も、6月4日コートジボワール代表戦も、当時の日本代表チームは完敗だった。中村俊輔ら主力選手が全く振るわなかった。

そこで岡田武史監督は、主力に帯同させていた本田圭佑などのいわば「二軍チーム」を、南アW杯本番初戦のカメルーン代表戦（6月14日）から起用するという「暴挙」というか「賭け」にでた。これがまんまと当たった。本田圭佑らが大活躍しグループリーグ2勝１敗で、国外開催大会では初となる決勝トーナメント進出を果たした。

**その岡田武史監督も「突然、抜擢された監督」だった**。1998年仏W杯でも岡田は監督を務めたが、これは前任の加茂周監督が突然更迭されたことによる「急場しのぎ」人事だった。ジャージ姿で選手に指示を出す岡田は監督として、日本代表チームを仏W杯予選勝ち抜きに導いた。1997年11月16日「ジョホールバルの歓喜」、即ち、日本サッカー界悲願の「W杯本戦初出場」を決めた。

2010年の南ア大会も岡田は「突然、抜擢された監督」だった。本来の日本代表監督はイビチャ・オシムだった。オシムが急性脳梗塞で緊急入院し、監督を務められないということで、急遽、岡田にお鉢が回ってきたのだった。

そして、先ほど話した様に、2010年南アW杯では、岡田監督は本田圭佑などの「二軍チーム」を急遽起用し、大成功を収めたのだった。

**こう言っては失礼だが、「無名の人の抜擢起用」、これが功を奏したといって良いだろう**。そしてこれが、今回の「本田の苦言」即ち『必要なのは「個」』を日本人が受け入れる下地を作ったのだろう。

「負けてるときは、人を替えろ（もしくは変えろ）」。これは団体スポーツの鉄則かもしれない。もしかしたら、一旦は多少「和」を乱してでも、チームワークを乱してでも、新しい「個」が必要なのかもしれない。そしてその尖（とが）った「個」達による、高次の「和」というか高次のチームワークを、或る種の「戦い」「混乱」の中から新たに獲得する必要があるのかもしれない。

「予定調和」の変革では打破できない苦境。こういったものが存在するのだろう。

**さて、本題**。**「失われた二十年」に苦しむ日本はどうしたら良いのだろうか？**

　確かに「日銀総裁の人事刷新」は功を奏した。「異次元の金融政策」は日本の金融経済に変化をもたらし、この「金融政策の矢」が放たれた昨年末から、日経平均株価は上昇し円相場は円安に変化し始めた。2月に、第二の矢すなわち「財政政策の矢」が放たれたときもこの傾向は保たれた。しかしその後、第三の矢すなわち「新成長戦略」が日本の実体経済に放たれたあと、[5月半ばからは、日経平均株価は下がり始め、円相場も円高に反転した](camphor%20effect%20come%20down.ppt)。

　ここからは私にもキチンとした「答え」はない。ただ、尖った新たな「個」達が、「新成長戦略」「実体経済」に必要。新たな尖った「個」たちによる新たな高次のチームワークが必要。そんな気がする。

**もっとも、「そんな人材はいない」との声が上がるだろう**。つまり…確かに上記二つの分野、即ちサッカーと金融政策論の分野には世界に通用する本田圭佑や黒田総裁の様な「人材」がいるかもしれない。あるいは、もっと沢山の人材が育っているのだろう。しかし、「新成長戦略」「実体経済」の分野にはそんな人材はいないよ。だからこそ「失われた二十年」をニッポンは続けているんだ…との声が聞こえてきそうだ。

　うーん。返す言葉が見つからない。その通りだと思う。対応策としては…。

　私としては、Partnership論の研究を押し進めること、『Private Company Law Reform』の和訳作業を押し進めること、位しか思いつかない。そして啓蒙普及活動を、ドン・キホーテの様な孤軍奮闘ではあるが続けていくしかない。私としてはこれしか思いつかない。

今週は以上。来週も乞うご期待。